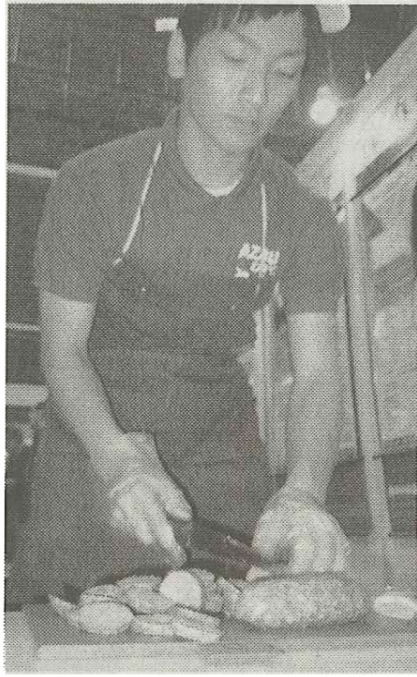


# 羊で耕作放棄地解消

## 麻布大 実証研究 限界集落対策も

麻布大学（相模原市中央区）獣医学部の学生らが、綿羊の飼育を通じて中山間地の耕作放棄地を解消しようとして、長野県内で実証研究を進めている。3年間かけ、飼育方法や綿羊肉の市場ニーズなどを調べ、限界集落対策にもつながる新たな畜産プロジェクトを発足。



綿羊ソーセージを切る学生＝千葉・幕張メッセ

産のビジネスモデルの確立を目指している。

同大学とJA全農、長野県須坂市の酪農経験者や耕作放棄地所有者約20人でつくる「信州豊丘めん羊飼育協議会」は昨年4月、「遊休農地再生型めん羊飼育実証プロジェクト」を発足。

耕作放棄地の増加や若者の地元離れ、獣害に悩まされていた同市内で、10頭の飼育から始めた。

綿羊は、おとなしい性格で反すう動物の中では小型で扱いやすいため、高齢者でも飼育が可能という。同大学によると、実際に飼育すると、イノシシやシカによる被害が減ったほか、雑草をはむことで荒地地の解消などの効果があったという。

一方で、高品質の綿羊肉を販売して地元住民の収入源にすることで経済的な自立も目指す。同職員は「生肉の状態を生かして、輸入の冷凍肉にはない国産の良

さを分かってもらいたい」と自信をみせる。

学生らは販売先を開拓しようとして、調理法の開発や市場調査などを実施。先月30日、千葉・幕張メッセのイベントで、大学内の食品加工場で製造したソーセージを初披露したところ、飲食店など数軒から仕入れたいとの要望があった。

課題は、綿羊飼育にかかる経費に利益が見合うか否か。同協議会の羽生田成一会長も「餌には草だけでなく濃厚飼料も必要だし、冬場のお産には畜舎も必要になる」と慎重だ。

放牧の規模は徐々に広がり、現在は5畝ほどに約25頭。羽生田会長は、3年間のプロジェクトが終了する来年度以降に地域住民だけで事業を引き継ぐかどうか、見極めたい考えだ。

（柏木 智帆）